

22 歳の決断

山本淳子

この 4 月より大阪女学院大学で勤務させていただいている。学習意欲が旺盛な大学生・短大生と日々接する中で、たくさんのエネルギーをもらっている。彼女たちを見ていて、ふと、30 年以上も前の就職活動のことを思い出した。

当時は「英文科を卒業するのだから英語が使える仕事がしたい」という強い思いがあったものの、具体的な目標がないまま、ありとあらゆる職種の採用試験を受けた。有難いことに一般企業と私立の女子高の内定を頂き、私は揺れた。企業でも高校でも英語を生かすことができる。どちらも魅力的だった。自分に向いている方を選べばよいと思うのだが、判断がつかなかった。そこで、ゼミの先生に相談に伺った。すると先生はこうおっしゃった。

「英語の先生がいいですよ。あなたは人間を育てることができるんですよ。人の成長を見ることが出来る素晴らしい職業だと思います」

私はその言葉に背中を押され、英語教員に傾いた。そして最終決定の前にもう一度、その私立高校の様子を見てみることにして、高校の斜め前にあった小さな喫茶店に入った。ちょうど放課後の時間で、5, 6 人の女子高生が入ってきた。すると店内は一気に雰囲気華やぎ、賑やかになった。彼女たちは周りを気にすることもなく、学校のこと、おそらく先生のことなどを楽しそうに話していた。今思うと、そんな振る舞いはごく当たり前のことなのだが、私はすっかり気後れしてしまった。ほんの 3 つか 4 つしか変わらない彼女たちを「育てる」ことなど、到底できないと感じたのである。

振り返ってみれば、それは「逃げ」だった。しかし、私の選択は正解だったのではないかと思う。教職課程は履修していたものの、「先生になりたい」という情熱は十分ではなかったからである。あのとき感じた戸惑いは、その表れだったのだろう。

企業で社会経験を積み、様々な出会いや学びを経て、英語を教える道を歩むことになった。あのときアドバイスをくださったゼミの恩師に報告したところ、とても喜んでくださったことを覚えている。

教育とは教え、育てることであるが、同時に私も真摯に学ぶ人たちから教えられ、教員としてもっと成長するよう、育てられていると感じている。恩師があの時おっしゃった言葉を胸にこれからも精進していきたい。

(山本淳子 教授/教員養成センター)